

ズボン形態の地域的比較研究

古野美那子

Minako FURUNO : A Comparative Study on the Form of Trousers
in Different Localities

I 緒 言

今日の服飾文化の大部分は、西洋から東洋に伝播されたと考えられているが、その中でズボンは東洋から西洋にもたらされた文化の一つである。ズボンの伝来は、西洋の巻衣裳の形態を根本的に変化させ、それまでの彼らの衣服に対する観念を改めさせた。ズボンは地中海亜熱帯地方を中心とする古代西洋の衣服形態と激しく対立し、今日のアルプス山脈の北を中心とする西洋文化や東洋文化と融合しながら現在にみる豊かな服飾文化を築いた。中国においてもズボンの導入、普及に困難をきわめた。北方遊牧騎馬民族のズボンが激しい抵抗を通して導入されると、衣服の基本形態として形の上に修正を加えながら中国の風土に根をおろした。

衣服の基本形態の中で下衣としてのズボンは、衣生活における保温性と機能性という優秀さを持ちながら宗教的、道徳的あるいは美的感覚により古代から19世紀半ばまでの長期にわたりスカート型衣服と対立する。しかし、この両者の基本形態の大きな違いは、ある民族が住んでいた地帯の自然環境やそれに基づく生活様式と民族固有の美的表現の相違によるということが服装の歴史を通して知ることができる。

II 語 義

ズボンという語は、主に男子の用いる洋服の下衣を総称する日本語である。語源は、一般的には明治時代にフランス語のスカートを意味するジュポン (jupon) が日本語化したものとされているが、¹⁾ それ以前の慶応年間からズボンの名称が書物に存在している。²⁾ さらに、明治31年刊の落合直文編『ことはのいつみ』の中に、「ずぼん、洋袴、幕末の頃、幕臣大久保誠知と云う人のこれを穿けば、ずぼんと足のはいるより言い初めたる語。洋服の一部分、足に穿くもの。形、股引に似たり。」³⁾ と書かれているようにあまり明らかではない。

ここで、ズボンとは筒状の布で左右の足を別々に包みそれが腰で支えられ下半身を被うものとする。また、ズボン形式衣は世界各地の男女に用いられているが、東南アジアのタイで着用されているパー・ヌン（長布を腰に巻き、布の両端を燃って股をくぐらせてベルトに挟んで着る。）やビルマ、北インドのロンギなどは外観、機能上においてズボンと似ているが、巻衣に

分類されるので除外した。

III 歴 史

ズボンを最初に用いた民族を探ることはむずかしいが、資料の広範な地域分布から、アジアヨーロッパの砂漠や荒野に住む原始的遊牧民族のものであるといわれている⁴⁾。古代ペルシャ人、スキタイ人の遺跡に多くのズボン姿が残されている。これらから紀元前よりズボンを着用していたペルシャ人、スキタイ人、モンゴール人やアラビア人の各民族は、乾燥した荒野一帯に住む原始的遊牧生活と同時に騎馬民族的生活の共通性を持っている。古代ペルシアと中国の二つを例にして、ズボンの普及をたどってみたい。

アジア西南のイラン高原で栄えたペルシア（A・D・550頃）はメディア人とペルシア人の二つの民族からなり、ペルシア人は牧畜系アーリア人だった。ペルシア人は昔からズボンと袖付チューニックを着用していた。ギリシアを中心とする地中海文化の中でズボンは特異なものとして存在したが、保温性と機能性を備えたズボンは民族間の接触の激化とともに小アジア、シリア、パレスチナへ普及していった。このペルシアズボンはアナキザリス（anaxarides）と呼ばれていた⁵⁾。第1図のペルシア王とシリアの兵士のズボン姿に見られるように、ズボンは皮革で作られ、足にそってぴったりし、裾口は特に細く足首までの長さである。ズボンは遊牧民の賤服とみなされていたために、普及は容易ではなかった。しかし、活動範囲の拡大化する男子にとって、主として乗馬の習俗などの要求に応じて着用されていったと考えられる（第2，3，4図）。このようにペルシア人が西アジアの服装文化であるズボンをヨーロッパに伝えたことは、服装史上注目すべきことであろう。

中国においては、元来の中国服は上衣と下衣（ズボン状の袴とスカート状の裳）の二部形式からなっていたが、袴は上着としては用いられていなかった。ズボンが乗馬とともに知られるようになったのは、戦国時代の趙の武靈王（B・C・326～B・C・299）が胡服令を出したときにはじまる⁶⁾。匈奴は、広くシベリア、モンゴリア、中央アジア、西南アジアの南陸全体に猛威をふるった遊牧民族で、毛織物や皮革の広袴を着用し騎馬兵力を備えていた。趙国がこの匈奴に接触して、新しい戦闘方法を知り、王は古来の衣裳の非活動性から、騎馬に機能性を発揮する胡服の必要性を痛感した。王はこの胡服を奨励したが、中国人の中には容易に浸透しなかった。武靈王はついに胡服令の発布に成功したがこれは武人の間にのみ流行した。黄河流域の黄土地帯に居住し長く農耕社会を形成して、豊かな文化を創造してきた漢民族は、移動的遊牧民族によって脅かされて、漢民族にズボン形式の袴が定着していった。しかし、上流男子はズボンの不恰好をことさらに嫌い、ズボンの上に裳をつけた。この時代においては、武人の服制や狩猟、旅行の服装、庶民の作業服としてズボンの着用をみた（第5，6図⁷⁾）。六朝時代になると、胡服様式は袴褶の制度として文武百官の朝服として正式に採用された。胡服を賤視する風習から抜け、唐時代には中国人一般が筒型のゆるやかな袴をはくようになった。唐代文化全般

が世界的特徴を示しているように、服装にも国際的文化が表現されている。以上のような背景を持って、ズボン世界的に流布した。



第1図 ペルシア王とシシアの兵士
(B. C. 500頃)

(R. Broby Johansen, *Body and Clothes*,
Reinhold Book Corporation, New
York 1968 による。)



第2図 アッシリアの兵士 (B. C. 700)

(R. Broby Johansen, op. cit., による。)



第3図 パルティアの王像 (B. C. 200) シャミー出土
(後藤茂樹編『原色世界の美術』13巻, 小学館,
1970による。)



第4図 サナトリグ王立像 (A. D. 1~2)
ハトラ出土
(後藤茂樹編, 前掲書による。)



第5図 大 臣
(張末元『漢代服飾図様資料』1963による。)



第6図 農 民
(張末元 前掲書による。)

なお、現在の形のズボンが市民服の一部として着用されるようになったのは、西洋においてはナポレオン戦争の影響で動きに対するズボンの優秀さが認められたからである。その戦争の後期には、ブリーチズ（一般的には膝下までの半ズボン）に代ってトラウザーズ（足首までの長ズボン）が軍袴に採用された。また、乗馬がスポーツとして一般に普及したことなどにより、次第に市民服になってきた。我国においては、徳川末期の洋装導入によりすでにトラウザーズとしての形が出来上ったものを武士の軍服に採用された。後には、一般民間人にも普及し、今日のように男女ともに着用されている。

IV ズボンの世界各地の形態と機能

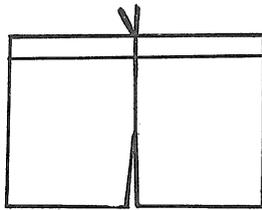
ズボンの発生とズボンが世界各地に伝播して行く様子を見てきた。ここでは、ズボンが世界各地の風土に投げこまれ、各民族の中で工夫されながら育ってきた形態と機能を裁断図の発達段階を追って今日に至るまでを考察してみたい。

(1) 第7、9図は、直線によって構成されている裁断図で非常に簡単なものである。第7図はスカート状のものの股下を両足に別けたもので腰は紐でしめるようになっており、腰廻り全体にギャザーがよる。足は左右に別れているが裾口が広いので、保温性に欠ける。スカート丈のものでありながら現在着用されている第8図のキュロットスカートは、ダーツや曲線が用いられており、第7図と第8図では裁断図が非常に異なる。第9図は第4図と同じ形態であるが足首をしぼるようになっており、裾口に靴下の部分が接合するようになっている。着用時の形態は、上下が紐でしぼってあるために中央部がカボチャ状にふくらむ。第7図より第9図は動作がしやすく、裾の開口部が靴下に続くことは熱砂の砂塵ストームから身体を守る役割をはたしている。

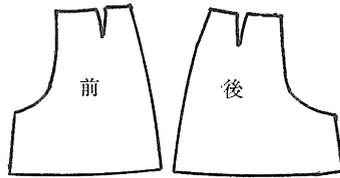
(2) 第10図は(1)で示した図と同様に直線的で四角形の簡単な裁断図であるが、足首の部分が両脇によって左右の足間にたっぷり布がある。全体的にゆったりしているため、足の運動の

妨げにはならないだろうが、足首の近くの余分な布がもたつく可能性がある。第11図の場合は、両足間の襠が低い位置にあるため余分なたるみが生じる。第10, 11, 12, 13図のいずれも腰廻りを紐でしばって穿くようになっており、だぶついた感じを与える。第13図の麻製のズボンは、腰廻り寸法が2.8ヤードもありいかに大きいか想像できるであろう。

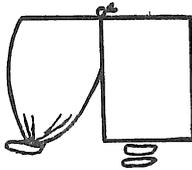
(3) 第14図に示した裁断図は、これまでのものよりさらに複雑化している。木綿布が使用されているこのズボンは、全体的に大きくたっぶりとしているが襠の形に特徴が見られる。すねを包む部分と股の部分が広がり動作がしやすくなっている。しかし、股下の部分に余分なたるみが生じる。



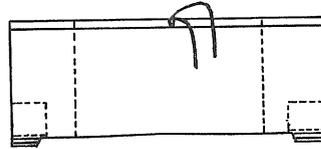
第7図 カスピ海地方 Udin 人の女子ズボン
(Max Tilke, *Costume Patterns and Designs*,
A. Zwemmer Ltd, London, 1956 による。)



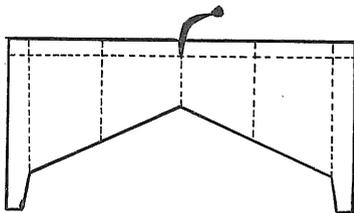
第8図 キュロットスカート
(原田信子編, 『ドレスメーカー』,
No.262, 鎌倉書房1972による。)



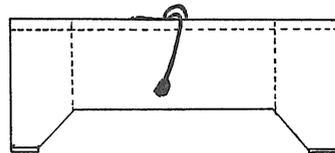
第9図 イラン女子ズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



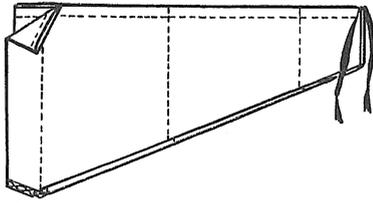
第10図 北アフリカ (アルジェリア) のズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



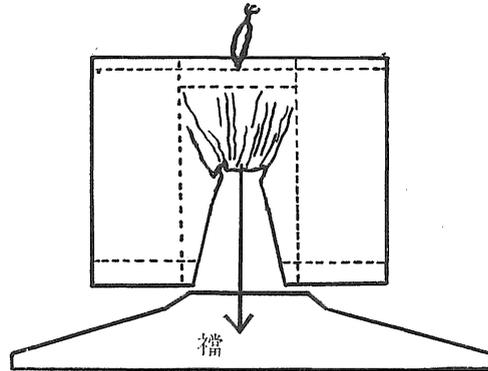
第11図 北アフリカ, ダルマチア, ヘルツェゴビナ
のズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第12図 アフガニスタン, 南西ヒマラヤの女子
のズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第13図 アフガニスタンのズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第14図 カスピ海沿岸のタタール人女子ズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)

(4) 第15, 16, 17図は, (1)(2)(3)の各ズボンのように四角い布の連結だけでなく, 襠が組まれて複雑になっている。また, 身体の線に合わせて余分なたるみを出来るだけ少くし, すっきりさせて今日のズボンに近い形を示している。腰廻りや足首をしぼらなくても身体にフィットしている。裁断方法の進歩が伺える。第18図のルーマニアの長いズボンを着装した姿を第19図に示す。第20, 21図の裁断図はよく似ているが全体的に大きくだぶついている。ズボンの普及にともなって襠を使用し, ズボンの機能性をたかめている。襠の形や大きさ, 使用法に色々な違いはあるが, 類似したズボンが次のような地域において使用されていた。

第15図——アルメニアの女子, バグダットの男子, エジプト, メシア, ペルシア, アラビア, 北西メソポタミアなど。

第16, 17図——トルキスタン, アラビア東部のイエメンの男子, 朝鮮, 中国など。

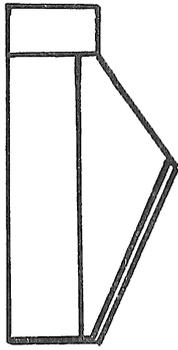
第18図——イラン, ハンガリア男子(古マジャール人)など。

第20図——北部インド, トルコ, アルバニア男子など。

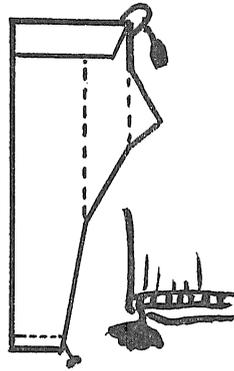
(5) 第22図はトルコの女子に着用されていたズボンである。絹織物の一種タフタが使用されて, 材料の光沢性や柔らかなドレープ性により優雅さをだしている。第23図はスカートを着用しているかのように見えるが, 古マジャール人の農夫や牧夫が用いた裾口の開口している寛容なズボンである。

(6) 第24, 25図は中国南西部女子のズボンである。裁断図は既出のものとはまったく違っている。亜麻や木綿が用いられており, 第24図は身体にぴったりし, 第25図はゆったりした対称的なズボンである。これらと類似したものがヴォルガ川の流域においても着用されていた。

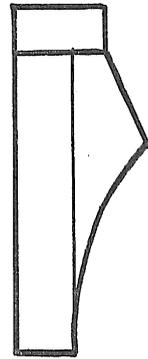
(7) 第26図は今日も中国で一般に着用されている褲子(クーズ)というズボン形式衣である。褲子には裾丈の長いものと短いものがあり, 特に短いものを短褲と称されている。この褲子を着くと臀部がだぶだぶし, 足首は細くぴったりして不恰好である。しかし, 防寒には特によく, 裾口に褲帯というリボン状のものを取り付けるので, 裾口から寒風が入らない。



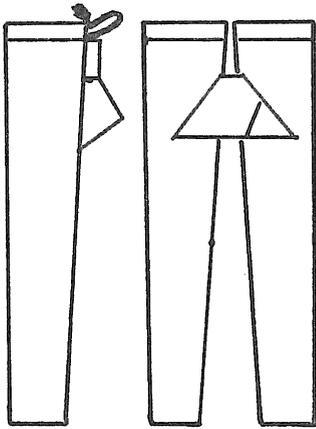
第15図 朝鮮女子のズボン
(Max Tilke, *op. sit.*, による。)



第16図 北部インドのズボン
(Max Tilke, *op. sit.*, による。)



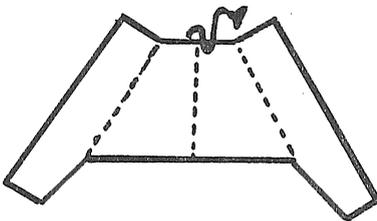
第17図 中国男子のズボン
(Max Tilke, *op. sit.*, による。)



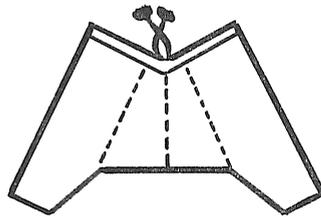
第18図 ルーマニアのズボン
(Max Tilke, *op. sit.*, による。)



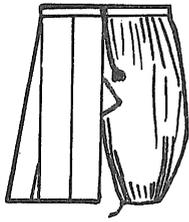
第19図 着 装 姿
(Max Tilke, *op. sit.*, による。)



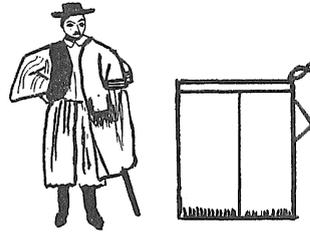
第20図 トルコ, アルバニアのズボン
(Max Tilke, *op. sit.*, による。)



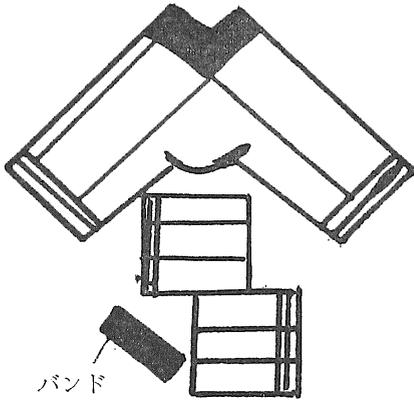
第21図 モンテネグロ, ダルマチアのズボン
(Max Tilke, *op. sit.*, による。)



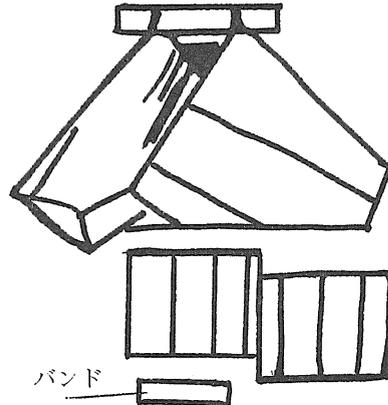
第22図 トルコ女子のズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



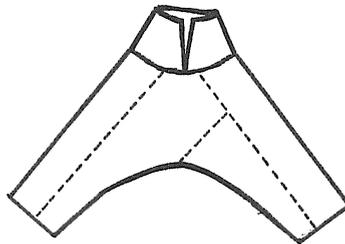
第23図 マジャール人のズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第24図 中国女子のズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第25図 中国女子のズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)

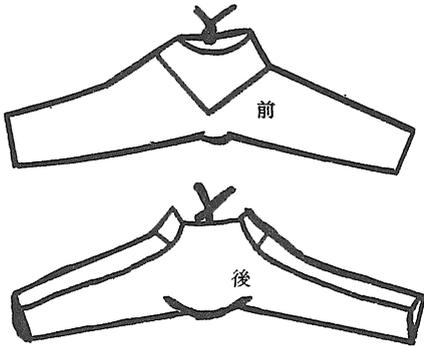


第26図 中国男子のズボン (Max Tilke, *op. cit.*, による。)

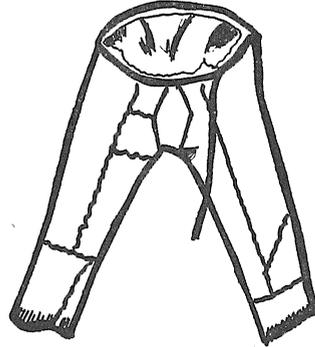
(8) 足にそって細く密着するように作られているズボンを第27, 28, 29図に示す。第27, 28図は寒冷地のものであり、衣類の防寒性が重視されていることがわかる。材料に毛皮が使用されており、形態上にも身体を外気から遮断するように工夫されている。第29図は、亜麻で作られており、身体の運動がしやすいように襠の工夫がみられる。形も現代風になり、構成技術が高度に発達していることを示している。

(9) 第30図は、現在一般に着用されているズボンの裁断図である。これまで見てきた裁断図と比較すると、直線の他に曲線やダーツが使用されて、襠を用いなくて足の運動性を高めてい

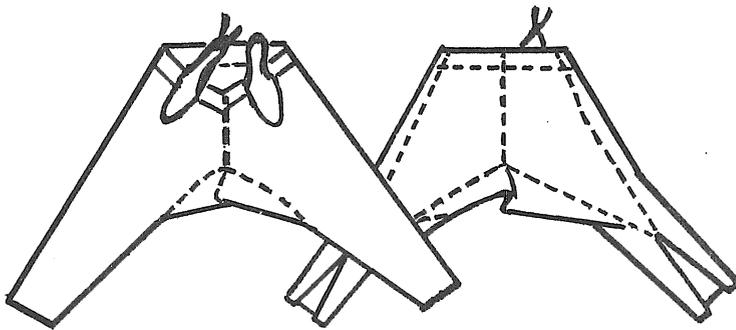
る。最近では、衣服の実用性のみならず人体を美しく表現する手段としての要求が大きくなって来た。この傾向は、ズボンにおいても同様である。防寒性や機能性にプラス美しさが、ズボンの構成にあたり裁断図をより複雑化しているのであろう。



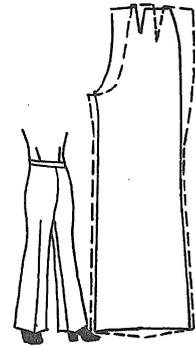
第27図 フィンランド、ラップランドのズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第28図 カムチャッカのズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第29図 セルビア、マケドニアのズボン
(Max Tilke, *op. cit.*, による。)



第30図 ズボン
(原田信子編, 前掲書による。)

(1)から(9)までズボン形態の発達を見てきたが、原始遊牧民族から発生したズボンは、一般的にアジア、特にイランや中央アジアの高原地帯、中国などでさまざまなズボン形態を生み出した。これらの創意工夫されたことからは、風土や気候、生活様式と密接に結びついていることがわかる。居住地域から産する衣服の材料、織物や構成の技術により、各民族特有の洗練されたズボンの形態が誕生した。

アジア、ヨーロッパ大陸の酷寒地のズボンは、裾の開口部を小さくして着用されており、寒さから身体を守る保温性と運動の機能性が要求されている。一方、暑い北アフリカの砂漠地帯で着用されているズボンは、だぶだぶな寛容な形である。この形態は、強烈な日射を持つ砂漠ではズボンの空間における空気の対流による涼感と、夜の急激な気温降下には逆の保温効果を持っている。これからの衣生活が自然環境の影響を少しでも受ける以上は、これら民族固有の良さを持ったズボンの形態は工夫されながら生き続けるものと考えられる。

最後に本研究を進めるにあたり、御指導頂いた文化女子大中田満雄教授、日本女子大樋口ゆき子助教授、ならびに資料の借出を頂いた日本女子大図書館に深く謝意を表します。

注

- 1) 坂部甲次郎、『おしゃれ語源抄』、東京堂、昭和38年、p.26.
- 2) 福沢諭吉著『西洋衣食住』に「ズボンツリ」という用語が記されている。
- 3) 太田臨一郎、「ずぼん、せびろ、ちょっき考」『被服文化』No.116、昭和44年、p.69.
- 4) 丹野郁、「東西両洋におけるズボンの起源および交流について」埼玉大紀要教育、7、p.43.
- 5) R. Broby Johansen, *Body and Clothes*, Reinhold Book Corporation, New York, 1968, p. 78.
- 6) 被服文化協会編、『服装大百科事典上巻』、文化出版局、1971、p. 658.
- 7) 張末元、『漢代服装図様資料』、1963.

参考文献

- 1) 江馬務、『世界服装史要』、星野書店、昭和26年.
- 2) 村上信彦、『服装の歴史1・2・3巻』理想社、1955、1956、1956.
- 3) 永島信子、『日本衣服史』、芸艸堂、昭和43年.
- 4) エリック・ギル（増野正衛訳）、『衣裳論』、創元社、昭和27年.
- 5) Pascale Saisset（日向あき子訳）、『服飾の歴史—その神秘と科学—』、美術出版社、1964.
- 6) Dr・Ludmila Kybalová（丹野郁他訳）、『服飾百科事典』、岩崎美術社、1971.
- 7) 田中千代、『服飾事典』、同文書院、1969.
- 8) 丹野郁、『西洋服飾発達史古代・中世編』光生館、昭和41年.
- 9) 石山彰編、『服飾辞典』、ダヴィッド社、1972.
- 10) 杉本正年、「漢代の服飾その1・2・3・4・5・6・完」(『被服文化』No.107—113、1967—1968、所収)。
- 11) 香山陽坪、「スキタイ的遊牧文化」(『被服文化』No.117、1969、所収)。
- 12) S・I・ルーデンコ（杉本正年解説）「南シベリアの発掘品にみるスキタイの服飾」(『被服文化』No.117、1969、所収)。
- 13) 丹野郁、「ズボンの発生とスキタイ」(『被服文化』No.117、1969、所収)。
- 14) 佐藤甚次郎、「土地と被服」(『被服文化』No.32、1955、所収)。